写真 116　全景（南から）

写真 117　溝 1（南から）

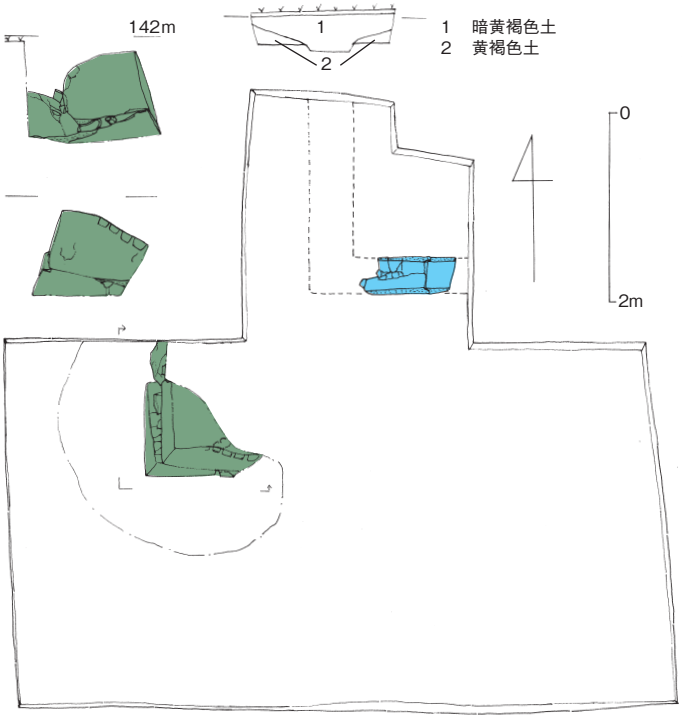
写真 118　溝 1（北から）

写真 119　溝 1（西から）

Ｔ－４（第 63 図、写真 120 ～ 122）

多聞櫓の南西角内側を確認するために設定した。絵図によると、櫓の幅は「三間」という記述があるが、礎石など建物自体に関係する遺構は確認できなかった。櫓に関連する遺構としては、豊島石製の雨落ち溝が唯一である。側壁は失われており底部だけではあるが、櫓と平行して北側に長さ約１m分だけ遺存していた。抜き取りの痕跡か

写真 120　全景（西から）



第 63 図　Ｔ－４平面図（Ｓ＝１：80）

写真 121　溝 1（南から）

写真 122　溝 1（東から）

ら北に直角に折れる南北方向の雨落ち溝の位置関係も把握できた。雨落ち溝の内法幅は 30cm 弱である。建物と雨落ち溝の位置関係から、北方向、東方向とも軒の長さは水平距離にして約 1.5 m前後と推定される。雨落ち溝底面と石垣天端面とのレベルはほぼ同一である。

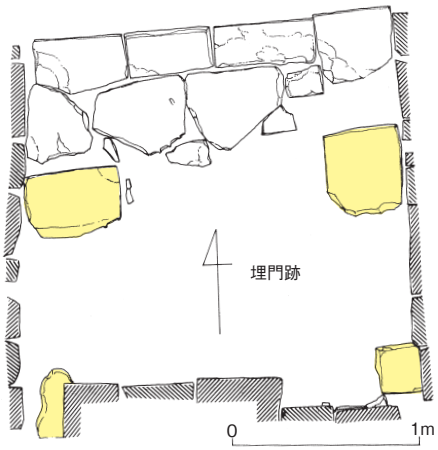
この他に、旧石垣の南西角を検出した。津山城の石垣は 3 時期あることが確認されているが、2 時期目にあたる石垣である。この石垣と最終段階の現在の石垣との間は全て栗石で充填されている。

8．第７次調査（平成 15 年度）

Ｔ－１（第 64 図、写真 123・124）

埋門跡の遺存状況を確認するために設定した。埋門は別名裏切手門とも呼ぶ。埋門は文化６年（1809）、本丸御殿台所から出火した火災により焼失したが、翌、文化７年（1810）、本丸御殿とともに再建された。

現状で観察される４箇所の礎石と考えられるもの以外には、土管が２箇所で検出されただけである。１箇所は埋門南側石段の最下段の下層に径 10 ㎝程度のものが埋設されていた。また、もう１箇所は北西礎石の東側に床面に接して破片３点が出土した。これらの土管を一連のものとして復元すると、上面は礎石よりも高い位置にくることになる。また、南側最下段の石段が直線になっていないことなどから在城期のものではなく、後世のものと思われる。



第 64 図　Ｔ－４平面図（Ｓ＝１：80）

礎石と考えられる４箇所の石の内、南西のものだけが河原石で、他は全て切り石である。そして、南側のものが北側のものに比べて小ぶりである。これらの石が礎石としての位置関係を保っているとした場合の規模は、芯々距離で東西約 3.2m、南北約 2.2m である。この門は地山を削り出すことによって形成されている。

写真 123　全景（東から）

写真 124　全景（北から）

Ｔ－２（第 65 図、写真 125 ～ 131）

裏鉄門跡の遺存状況を確認するために設定した。裏鉄門も埋門同様、文化６年の火災により焼失した。しかし、再建されることなく廃城をむかえた。従って、遺構としては火災前の時期に限定される。

絵図によると、この門は基本的に東西２間、南北１間で北西側にくぐり戸が付く構造になっている。規模は心々距離で南北約 5.2m、東西約 4.2m である。門の南側には東西２間、南北２間で６畳の番所が取り付く。番所の南北の心々距離は約 3.1m である。

第 65 図　T－2・3 平面・断面図（S＝1：100）

写真 125　全景（東から）

写真 126　全景（南から）

写真 127　全景（北から）

写真 128　便所 1・2（南から）

調査前に確認されていた礎石は、西側の石列に組み込まれている 5 箇所以外には、門北側中央の 1 石だけであった。番所の北、東、南の中央の礎石はいずれも抜き取られていた。

絵図によると、番所の東側にはトイレ大小が東西に並んで描かれているが、絵図どおりにトイレ跡（便所 1・2）が検出された。便所 1 が大で便所 2 が小用である。共に地下に桶を埋める形式のもので、床面には桶の底板の木質が遺存していた。桶の径は底面で 80 ～ 90 ㎝、検出面から底面までの深さは最も深いところで約 40cm を測る。

写真 129　便所 2（北から）

次に、暗渠排水にふれることにする。排水溝は 2 時期認められた。古い時期の排水溝は裏鉄門の東側に併行して南北に走り（溝 1）、中央部から直角に西方向に延びる（溝 2）。排水は木樋で幅は約 30 ㎝程度である。溝 1 の検出面から底面までの深さは約 45cm を測る。溝 2 は木樋を固定するため、拳大の円礫を南北両サイドに配している。また、南側には石垣状に石を配置している。溝の埋土は砂質土で、木樋に使用していた鉄釘が出土した。

新しい時期の溝は、古い時期の南北溝（溝 1）の位置はそのまま踏襲している（溝 3）が、西方向に延びる溝はルート変更し新設している（溝 4）。新しい南北溝は豊島石製で、底面は古い時期の底面か

写真 130　溝３・４重複状況（東から）

写真 131　溝２・４切り合い関係（東から）

ら約 25 ㎝高くしている。中央部分は豊島石製のＵ字溝が失われており、北側、南側部分が残るだけである。Ｕ字溝の深さは約 25 ㎝である。Ｕ字溝の側壁が破損した場所は、石で補修している。

溝３の中央やや北寄りに西方向の溝が取り付く（溝 4）。溝には全て蓋が付く。古い時期は直角に取り付いていたのに対し、南にやや偏って古い溝を切って造られている。古い時期の溝（溝 2）の底面は同レベルで取り付いていたが、新しい時期の溝は特異な取り付きとなっている。すなわち、南北方向の豊島石製排水溝（溝 3）の底面を約 20 × 30 ㎝の範囲で刳り貫き、その下に豊島石製排水溝を敷設するという二重構造になっている。接続部での両者の底面のレベル差は約 30 ㎝で、南北溝（溝 3）の床面と東西溝（溝 4）の蓋上面のレベルはほぼ同一である。

番所南側の石垣沿いには溝の中に石が充填されている状況が確認された。これはこれまでの調査でも確認されたように、石垣の排水施設である。

Ｔ－３（第 65 図、写真 132 ～ 136）

絵図によると、腰巻櫓石垣の西側は南接する七間廊下石垣よりも更に西側に張り出した構造になっている。この腰巻櫓石垣が、明治 23 年（1890）に崩壊した。その後、積み直しが行われたのであるが、七間廊下石垣西面のラインに合わせて積んだため、西側張り出し部が失われた状態で今日に至っている。このため、その規模と根石の遺存状況を確認するために設定した。

写真 132　全景（北から）

写真 133　全景（南東から

写真 134　桝１（東から）

調査の結果、最下段の根石がほぼ遺存していたことから、西側張り出し部の規模は西へ約 1.5m、南北約 11m であることが判明した。この張り出し部南端から約 4m 南の位置で石組みの桝（桝 1）を検出した。この桝の上位の石垣には本丸の排水を集めた方形の穴が開口しており、この桝が本丸の排水を受ける構造のものであることが判明した。さらにこの桝には、南方向に豊島石製の排水溝が取り付き、下段石垣に排水をしていく構造になっている。

絵図によると、桝の西側には門が位置する。調査の結果、門の柱は柱穴の底面に礎石を置いた掘立柱であることが判明した。門の幅は芯々距離で約 2.7m である。門の北側には、控え柱と考えられる柱穴が複数検出されたことから建て替えの可能性も考えられる。

写真 135　桝 1（南から）

写真 136　調査区南半部（南から）

9．第８次調査（平成16年度）

Ｔ－１（第66図、写真137～141）

本調査区は裏鉄門から西方向へ石段を降りきった場所で、東西棟の裏中門の南側枡形に相当する。調査はこの枡形内の地下構造を把握するために行った。

丘陵の北斜面にあたるこの場所は、築城時の造成により大きく削平を受けた箇所の一つである。従って、枡形を形成する南側と西側の石垣最下段の石が直接岩盤の上に乗っている状況が観察される。当然、枡形内床面も岩盤削り出しであることは言うまでもない。南側の岩盤の高さは床面から最大で90㎝を測る。西側はほぼ床面上に石垣がのる。他に城内で岩盤が露出している状況を確認できる箇所はなく、この場所が唯一である。

枡形は床面で東西11ｍ、南北８ｍを測る方形で、全体に南から北へ、東から西方向に緩やかに傾斜している。東から丁度４ｍの位置に南北方向の豊島石製の暗渠排水溝（溝１）が検出された。この暗渠排水溝は、まず岩盤に幅1.3ｍ前後、深さ約40cm、長さ８ｍの溝を掘り、その中央部に内法寸法で幅約25cm、深さ20㎝強、長さ0.8～1.5ｍのＵ字溝を連続している。その上を厚さ６～７㎝、幅約40ｃｍ、長さ50～80㎝の切石で蓋をしている。ただ、南側の石垣際だけは、豊島石製の蓋石ではなく凝灰岩製の割石を用いている。この位置の石垣真上にある豊島石製の暗渠排水溝からの排水は間接的にこの溝１で受ける仕組みになっている。

これまでの調査例でも確認されたように、排水は基本的に本丸から二の丸、二の丸から三の丸というように上から下に、非常に合理的処理されていることが分かる。

写真137　全景（東から）

写真138　全景（南から）

写真139　溝１（北から）

写真140　石垣上端の排水溝と溝１との位置関係（北から）

写真141　溝１蓋除去後（北から）

第 66 図　T－1・2 平面・断面図（S＝1：80）

Ｔ－２（第 66 図、写真 142 ～ 147）

裏中門跡の遺存状況を確認するために設定した。本調査区の南端を東西に走る石組みの開渠（溝 1）でＴ－１の桝形調査区とを画す。この石組み開渠は、調査前は全て埋没していた。

調査の結果、長さは 11 ｍ弱でこれまでの調査で確認されなかった二重構造の溝であることが分かった。すなわち、これまでの溝の事例は、石組みか豊島石製かのどちらかであった。そして機能的には、基本的に前者が開渠、後者が暗渠というものである。

写真 142　全景（東から）

本例では、下部に前述規模の豊島石製Ｕ字溝を連続させ、その上部に石組みを施すという構造のものである。Ｔ－１の溝１と直交し、底面のレベルが同一であることから排水の流路は適合している。

また、この溝の西端から１ｍ足らず東へ寄った位置からは、さらに直交して北方向へと延びる豊島石製Ｕ字溝（溝 2）が接続していた。北端の一部が失われているが、約８ｍにわたって遺存していた。蓋石は全て失われているが、暗渠になるものと思われる。両者の溝の直交部底面のレベルが同一であることから、Ｔ－１の溝１から連続したものであることが分かる。特に、雨の日はそのことが視覚的に理解される。

写真 143　溝１（西から）

さらに、裏中門東西石垣の北端はずれの位置に東西方向の豊島石製Ｕ字溝（溝 3）が検出された。部分的に失われている箇所もあるが、全体の位置関係は十分把握できる。溝２同様、蓋石は全て失われているが、暗渠になるものと思われる。この溝は昨年調査した裏鉄門から西方向への暗渠排水を受けたものであるが､残念ながら調査区以外は埋もれており排水の機能を果たしていない。

写真 144　溝２と礎石（南から）

溝３の南北両側壁上端部には、60 ㎝間隔ごとに 10 ㎝の切込み施している（写真 137）。側壁で遮断された水を処理するための工夫であろうか。この手法は第７次調査Ｔ－２溝３においても僅かに認められたが、本例は特に顕著である。

写真 145　溝３（東から）

写真 146　溝３（南から）

裏中門東石垣の地表面での南北距離は 10 m弱である。西側石垣は南の枡形まで一見一連の石垣のように捉えられるが、よく観察すると東石垣と対応して北から 10 m弱の位置に出隅石垣のラインが観察される。単なる石積みの時期差なのか、石垣遺構としての時期差なのかは不明である。

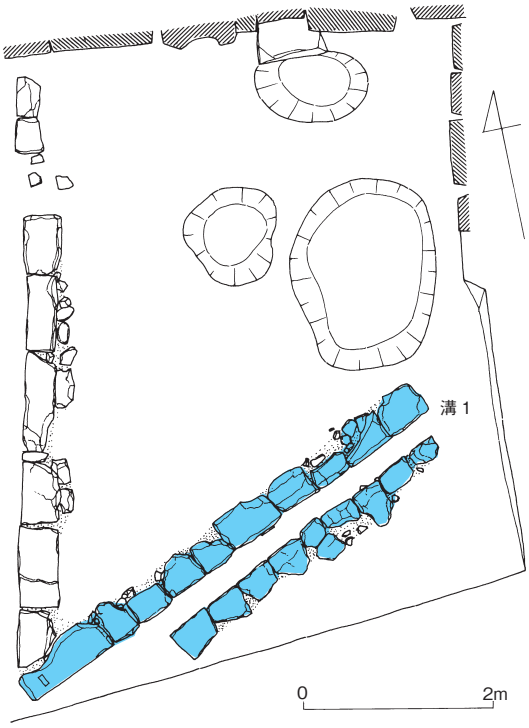
さて、裏中門跡の調査であるが、柱を支える礎石と思われる石は全部で 13 石検出された。この内、東西の石垣に接して南北に 4 石ずつ計 8 石は芯々距離約 2 mで規則的に並んでいる。また、東の礎石列から西に芯々距離で約 1.6 mの位置に南北方向に 3 石が等間隔に並ぶ。芯々距離はいずれも約 3 mである。そして、東西両石垣に接した 4 石の最も北側の石を結ぶライン上には芯々距離約 1.6 mで東から 3 石、西から 2 石が並ぶ。裏中門は絵図により若干構造が異なるが、独立した櫓門のようである。

写真 147. 東側礎石（西から）

10. 第９次調査（平成 17 年度）

Ｔ－１（第 67 図、写真 148）

写真 148　全景（南西から）



第 67 図　Ｔ－１平面図（Ｓ＝１：80）

本調査区は二の丸の裏中門から裏下門に至る石段直上部分に相当する。排水溝の遺存状況　写真 132 を確認するために設定した。調査区西端の南北方向の石段に対して、東方向に 45°偏った石組みの排水溝（溝 1）を検出した。この排水溝は調査前には完全に埋没していたが、部分的に石の天端面がわずかに観察されたことから、存在を確認することができた。長さ約 5 mにわたって遺存していた。北東方向へはもう少し延びていたものと考えられる。石組みは基本的に一石で、横口積みである。溝の幅は平均 25 ㎝、深さは 20 ㎝強である。

この排水溝は在城期のものであるが、埋没してしまったため調査区の南側に新たにフリューム官が設置されている。しかし、これも機能を失いその上を雨水が流れているという状況にある。

排水溝の北側に土壙が 3 ヶ所検出された。いずれの土壙からも円礫が多量に出土した。通路部分であることから廃城後の所産と考えられる。

Ｔ－２（第 68 図、149 ～ 153）

排水施設及び裏下門跡の遺存状況を確認するために設定した。裏下門跡の北側に、東西方向に走る豊島石製の排水溝（溝１）を検出した。この溝は二の丸から続く溝で、石段の下を暗渠で走り、石段を降りきった裏下門北側の桝形の地表面で開渠となる。開渠部分の長さは 9.7 m を測る。裏中門跡の調査でも見られたように、地表面の雨水を受ける構造のものと思われる。

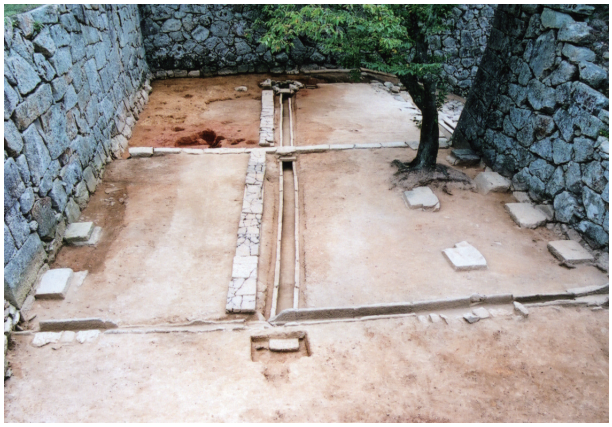
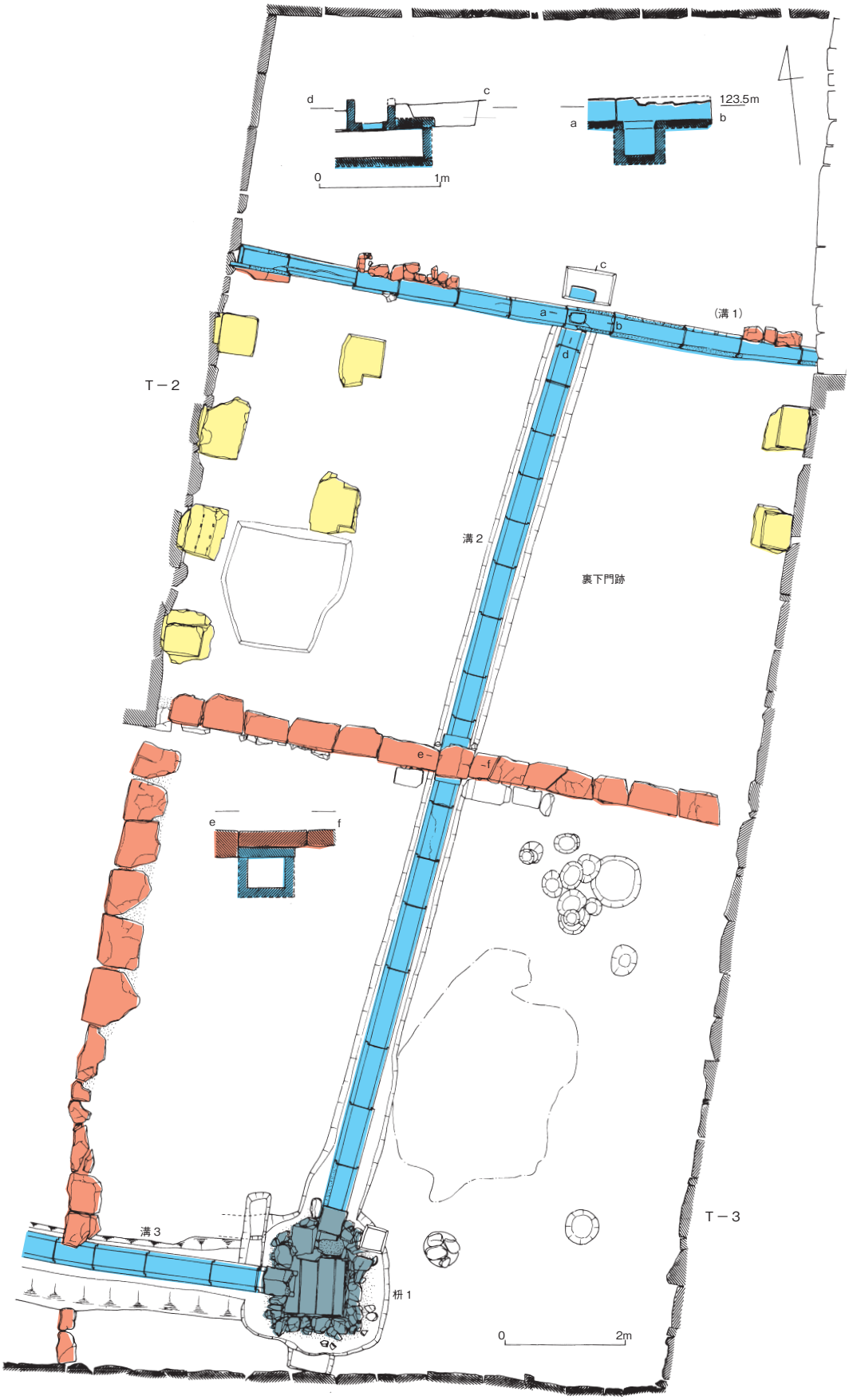


写真 149　全景（北から）



第 68 図　T－2・3 平面・断面図（S＝1：100）